

国立研究開発法人

国立成育医療研究センター

住所：〒157-8535 東京都世田谷区大蔵 2-10-1

TEL：03-3416-0181

HP：<http://www.ncchd.go.jp/index.html>



リハビリテーション科医師（2020年6月現在）

責任者：診療部長・発達評価支援室長・専門医・指導医 上出杏里（H15卒）

総病床数：490，診療科：28

理学療法士7名，作業療法士4名，言語聴覚士3名，臨床心理士1名

責任者からのコメント

当センターは、日本で最大規模の小児・周産期・産科・母性医療を専門とする唯一の国立高度専門医療センターであり、30 Most Technologically Advanced Children's Hospital in the World (2016)の1つとしてアジアで唯一選ばれた病院です。このような特色のあるセンターの中で、私達は、脳性麻痺などの従来の小児リハビリテーション医療の枠にとどまらず、幅広い疾患を有する児の障害に対して早期発見、早期介入を行い、子どもと家族が安心して地域で暮らせるよう社会参加支援を行っています。当センターであれば、急性期から維持期まで小児医療の様々な側面について、他施設では経験することのできない子どものあらゆる問題を経験することができるでしょう。

研修病院としての特徴

1. 従来の小児リハビリテーションの枠をこえた多彩な小児症例、独自の取り組み

外科系から内科系まで一般的な病態から重症、複雑、難治、稀少疾患の全ての障害を対象とします。特徴的なものをいくつか挙げます。■NICUでのハイリスク児の早期発達支援、フォローアップ■PICUでの積極的な周術期リハビリテーション、■人工呼吸器をつけた児の在宅移行支援、■小児がんセンター全例へのスクリーニングと長期治療に伴う廃用予防、緩和ケア、長期的社会参加支援、■移植術前後の発達評価支援、■先天性上肢形成不全児の発達支援と義手訓練、■脳損傷後の高次脳機能障害や発達障害児の社会参加支援、■器質的病変、中枢神経系病変、発達特性や治療の影響に伴う摂食・嚥下障害の評価・リハビリテーション治療、■人工内耳の術前評価・マッピング、■障害児の体力評価・パラスポーツ導入、■パラアスリートのメディカルチェックなど。いずれも、複雑な病態や家庭環境など様々な問題を抱える症例が多いため、急性期から在宅医療への移行まで様々な診療科、多職種が協同して最善策を練る必要があります。医療と福祉の間に立つリハビリテーション科医師の役割は重要です。

2. 自己研鑽のための恵まれた環境

当センターでは、病院と研究所が一体となって、高度先駆的医療の提供と成育医療に関わる調査・研究を推進しています。そのため、臨床研究の基礎講座が通年開講され、自分のリサーチエスションを形にする支援をしてくれる臨床研究相談室も整備されています。希望次第で症例発表や研究への参加をサポートします。

最後に

小児リハビリテーション医療では、障害を必ずしも治癒、正常化させるのではなく、障害の早期発見、早期療育からライフステージに順じた社会参加ができるよう成長発達を促し、周りの環境を整えることが重要です。子どもはいずれ成人へと成長します。リハビリテーション医療の中心は成人が多くを占めますが、当センターでの経験が、成人リハビリテーション診療の基礎として重要な学びの場となることを期待します。